

弘田龍太郎と仏教音楽 ——ルンビニー合唱団とパドマ合唱団をめぐって——

大地 宏子*

Hirota Ryutaro's Buddhist Music: Concerning Lumbini Chorus and Padma Chorus

OCHI Hiroko

要 約

作曲家 弘田龍太郎は、仏教音楽の作品を相当数つくっているが、その多くは出版されることなく自筆譜のまま遺されている。これは「仏教音楽」が宗教という特殊なフィルターによって、正当な芸術作品として評価されてこなかった可能性がある。本論では弘田の仏教音楽作品を整理するとともに、これらの作品がどのような特徴をもち、彼の作品群においてどのように位置づけられるのか明らかにした。

弘田が仏教作品を集中的に作曲していた大正末から昭和10年代頃、「仏教音楽協会」と「日本仏教童謡協会」が相次いで創設され、新しい仏教音楽の創出を目指した仏教界は洋楽受容の興隆期にあった。弘田は両協会に関わりながら、ルンビニー合唱団とパドマ合唱団の指揮にあたり、自身の新仏教音楽作品を次々に発表した。特にドイツへの留学を経たパドマ合唱団では、それまでの童謡調から脱却した壮大なオペラの作曲を手がけるなど音楽的に最も充実した作品を生み出した。

キーワード：弘田龍太郎、ルンビニー合唱団、パドマ合唱団、仏教音楽協会、東京大学仏教青年会

はじめに

童謡作曲家として著名な弘田龍太郎が、仏教音楽の作品を相当数遺していることはあまり知られていない。『弘田龍太郎作品集』全3集¹⁾に収録されている全361曲のうち（童謡は228曲）、仏教作品は6曲²⁾にとどまっている。しかしながら、本稿で調査した限りにおいて弘田の仏教音楽作品は80曲余り存在しており³⁾、その多くは出版されることなく自筆譜のまま遺されている。これは「仏教音楽」が宗教という特殊なフィルターによって、他の洋楽作品と別に分類され、正当な芸術作品として評価されてこなかった可能性もある。

弘田が仏教作品を量産していたのは大正末から昭和10年代あたりで、それより以前には東京音楽学校の邦楽調査掛における五線譜化作業に従事しつつ、「赤い鳥運動」にも関わり童謡の作品を発表していた。大正末からは邦楽調査掛の浄書作業に邁進し、昭和3（1928）年のドイツへの留学を経て最も充実した音楽作品を作曲していた頃でもある。ということは、彼の仏教音楽作品にこそ真髓が内包されているにもかかわらず、埋もれてしまっている可能性がある（たとえば、彼の代表作とされる《仏陀三部曲》は幻の曲となっている）。

弘田の仏教音楽に関する研究では、飛鳥寛栗の『それは仏教唱歌から始まった』や仏教洋楽作品の編年史がある⁴⁾。また、弘田が指導したルンビニー合唱団の演奏会活動をめぐって、山口篤子は近代日本の

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

合唱史と仏教界における位置づけを論じている⁵⁾。ただし、それらは弘田の仏教音楽作品の音楽的側面を十分考察しているものではない。そこで本稿では、弘田が指揮をとったルンビニー合唱団とパドマ合唱団の活動に注目し、彼の仏教音楽作品を整理するとともに、それらがどのような特徴をもち、彼の作品群においてどのように位置づけられるのか明らかにすることを目的とする。

1. 弘田の仏教音楽との出会い

弘田家は代々熱心な曹洞宗の信仰家だった。弘田は幼年期より「深遠かつ荘厳な仏教精神に憧憬を持っていた」ため、「後年、時代に適應性を持った新しい佛教音楽の創設のために、私財を投げうち、生活の總てを捧げて、不惜身命の精進を續けるやうになつた」と語っている⁶⁾。弘田いわく、仏教の声明、儒教の雅楽、御詠歌など古来から宗教音楽はあるが、現代人に対してそれらは昔ほど強い影響を与えなくなっているから、青年の心を掴み得る仏教音楽は、時代感覚を盛り込み、もつと澁刺とした明朗な力強いものでなければならない。この信念を堅持し、彼は独力で新仏教音楽の創設を提唱し、広範な仏教信仰運動の一翼として活動してきた、とのことだ⁷⁾。

一方、かねてより新仏教音楽を提唱していた櫻井義肇は、大正15(1926)年に東京帝国大学仏教青年会館(以下、東大仏青会館)に事務所をおくルンビニー合唱団を結成し、弘田を指揮者に招聘した。東大仏青会館は大正12(1923)年、学生仏教青年会運動を進めていた東京帝国大学教授の仏教学者高楠順次郎(1866～1945年)によって創設され、西本願寺普通教校時代に櫻井の同士でもあった高楠はルンビニー合唱団の顧問も務めた。関東大震災により同会館の資料は焼失してしまったため、ルンビニー合唱団がどのような経緯で弘田を指揮に迎えたのか詳細は不明だが⁸⁾、山口篤子は以下二つの可能性を指摘している⁹⁾。

一点目は、弘田の日本音楽との関わりに注目した合唱団が、彼を新仏教音楽に最適の作曲家として人選したことだ。ルンビニー合唱団は「在來の讚佛歌の演奏と、新佛教音楽の新發表を其の重なる目的として生れた新しい音楽の團體」¹⁰⁾として結成され、

当時の日本の仏教界では新たな仏教音楽(新仏教音楽)の発展へ向けた声が高まっていた(次章で詳述)。たとえばルンビニー合唱団の演奏を聴いた英文学者の幡谷正雄は、「ルンビニー合唱団を指揮してゐられる弘田龍太郎氏は、日本的な作曲家として、私の崇拜してゐる一人である。氏の從來作曲^{ママ}さられたものには、ジャパニーズ・センチメントが非常に豊かに盛られてある。かうした作曲家によつて新らしく佛教音楽が作られる事は、實に其の人を得たものと云はなければならぬ(下線筆者)」¹¹⁾と述べ、西洋音楽のテクニックを用いて日本人の思想感情を表現できる弘田に、「新しい仏教音楽」創出への期待を寄せている。また、東大仏青会館創設者の高楠が創刊した英文仏教雑誌“*Young East*”には、ルンビニー合唱団は現在、東京藝術大学の弘田龍太郎教授の指導のもとで活動しており、氏は西洋と東洋の音楽に造詣が深く、わが国最高のピアニスト、作曲家として絶大な人気を誇っていると紹介している¹²⁾。実際、弘田は小松耕輔と梁田貞の三人で、単に西洋の模倣ではなく日本的・民族的な作品づくりを目指す「作曲研究会」を結成し、大正9(1920)年には宮城道雄らの新日本音楽運動にも参加して洋楽と邦楽を融合させた和洋折衷の音楽を模索し続けていた。しかも弘田は、大正3(1914)年から昭和2(1927)年までおよそ14年にわたり、東京音楽学校の邦楽調査掛として邦楽の五線譜による採譜・記譜作業にあたっていたため、邦楽に対する高い識見をもっていたことは言うまでもない¹³⁾。いわば、ルンビニー合唱団の指揮者として弘田に白羽の矢が立ったのは自然の流れだったともいえよう。

山口の指摘する二点目は、弘田が東京帝国大学音楽部と深い関わりをもっていたことだ。以下、『東京大学音楽部50年史』¹⁴⁾の記述より、その経緯を要約してみよう。ルンビニー合唱団の結成より9年前の大正6(1917)年、東京帝国大学(本郷)にメオン・グルッペと称する管弦楽のグループが結成され(近衛秀麿や増沢健美など著名な音楽家が所属していた)、弘田を指揮者に迎えた。同じ頃、向ヶ丘の旧制第一高等学校(一高)には音楽同好者が集う学友会が存在しており、弘田はその小オーケストラ(多くのメンバーはメオン・グルッペと共通していた)の指揮も務めていた。それらが母体となり、大正9

年9月に東京帝国大学音楽部が正式に発足する。

ところで、旧制一高学友会では小オーケストラの他に男声合唱も活動しており、弘田はこの合唱指導にも携わっていたようだ。元団員は、「といっても学校の中に練習する部屋がなく、少人数なのを幸い、合唱の指揮をして下さる弘田竜太郎先生のお宅に押し掛けて御指導を受けた訳である（下線筆者）」¹⁵⁾と証言しているように、弘田は一高生たちを自宅に呼んで指導していたらしい。このことは弘田の四女木村ますみ氏の次の回想からも裏付けられる。「上野音楽学校へも近く、当時そこにあった一高のすぐ後の本郷向ヶ丘弥生町に居を構え、終生そこで過ごし」¹⁶⁾た弘田は、朝天気が良ければ曲を作り、東大構内へ散歩に出かけ、「大正時代には一高生の方達も家へいらっしゃって歌をうたったり、父が作曲した寮歌もあり、一高とも全く御縁がないわけではありませんでした（下線筆者）」¹⁷⁾。つまり、弘田は帝大のメオン・グループに加え、一高学友会の小オーケストラと合唱団の二つを指揮、指導していたことになる。このように、弘田は管弦楽や合唱の指揮、指導を通して東京帝国大学と深い関わりをもっていたことから、東大仏青会館に拠点をおくルンビニー合唱団との接点をもつことになったことも推察される。いずれにせよルンビニー合唱団との縁を機に、弘田は仏教音楽の作曲を本格的に始めたものとみてよいだろう。

2. 仏教界における洋楽受容のはじまり

時代に適応性をもった「新しい仏教音楽」の創設を目指した弘田が、「新仏教音楽の発表」を結成の目的に掲げたルンビニー合唱団の指揮に就いた大正末頃より、日本の仏教界では「新仏教音楽」という概念が注目されるようになる。そこで本章では明治期から戦前に至る日本の仏教音楽の変遷をたどりつつ、弘田が仏教界とどのように関わり、新仏教音楽をどのようにとらえていたのかを考察する。なお、日本の仏教界における洋楽受容については、緻密な資料調査にもとづきさまざまな視座から研究を重ねている福本康之の膨大な資料があり（福本は西洋書法による仏教の音楽を、「仏教洋楽」と統一表記している）、本章ではこれらの先行研究を援用しながら

整理していく。

2-1. 明治期から大正期；仏教唱歌から讃仏歌

明治期における仏教界は、明治政府の「神仏分離令」の影響等による弱体化への危機感から、教団立て直しの近代化が模索されていた。声明や雅楽など独自の仏教音楽が存在していた日本の仏教界に、西洋音楽の書法による洋楽が導入されたのは明治前期といわれる¹⁸⁾。キリスト教排斥の立場をとる仏教界では讃美歌の書法である洋楽を受容することに消極的だったが、折しも文部省の唱歌教育が導入され、その興隆に着目した教団は、とりわけ青少年や婦人対象の教化の必要性から仏教唱歌の創作を始めた。しかし、仏教洋楽作品の嚆矢として挙げられる《法の深山》（土岐善静詞）の旋律は、雅楽《越天楽》からの借用であるように、「当時発表された仏教洋楽作品の多くは、一般に認知された旋律からの借用か、創作旋律であっても日本的な音階（いわゆる四七抜き音階など）で書かれて」いた。これは、依然として西洋化していない当時の唱歌教育の普及率などに鑑みれば、演奏者も教える側も演奏可能な「日本的な旋律」による作品こそが、仏教洋楽の世界には必要とされたのであって、仏教唱歌は当時の仏教界における洋楽の浸透状況を考慮しつつ創作されていたことを物語っている、と福本は分析する¹⁹⁾。

ところが、明治40年代になると仏教唱歌の名は見られなくなり、キリスト教の讃美歌を模した「讃仏歌」という名が現れ始める。明治40年代は少年教会や日曜学校の勃興期でもあり、青少年の教化教材として讃仏歌集は昭和はじめ頃まで次々と刊行された²⁰⁾。

大正期の仏教洋楽で注目されるのは、大正7（1918）年に山田耕筰がハワイで発行した『らいさん』で、これは大正15（1926）年に日本でも出版され、大変な注目を浴びた。この曲集に収録された作品の注目すべき点は、それまでの仏教洋楽作品に対し、歌唱旋律とは異なった伴奏が付与されていること、および二～四声部による合唱形式で書かれていることである。この曲集を機に、日本の仏教界においても伴奏付きの作品や合唱形式の作品が発表されるという流れを生み出した²¹⁾。

2-2. 昭和戦前期；仏教音楽協会と日本仏教童謡協会

昭和に入ると、「仏教音楽協会」と「日本仏教童謡協会」が設立され、仏教音楽界は最も隆盛を誇った時期を迎える。弘田は前者の評議員と後者の顧問に名を連ね、両協会から仏教作品を発表していた。以下、両協会の概要と弘田との関わりを述べる。

1) 仏教音楽協会

昭和3(1928)年、「仏教音楽ノ大成及普及ヲ図ル」ことを目的に、「仏教音楽協会」が文部省宗教局内に創設された。「大正15年の春頃に、小林一郎立正大学教授と岩崎小弥太男爵および法学博士の松岡均男爵の間で行われた私的談義に端を発し」²²⁾、設立された当協会には、理事に高楠順次郎、評議員に高野辰之、田邊尚雄、乗杉嘉壽、松本又太郎らをはじめ、野口雨情、北原白秋、山田耕作、小松耕輔、弘田龍太郎、本居長世ら当時の第一級の詩人や作曲家を集結させた²³⁾。協会の会則第四条には「仏教音楽の研究」など6つの事業を掲げているが、実際には新しい仏教音楽作品の創作と、その新作発表演奏会が主な活動だったようだ。それまで「讃仏歌」として認知されてきた仏教音楽を、新たに「仏教聖歌」として発表会を開催し、昭和14(1939)年までに発表された計173曲を『佛教聖歌』という楽譜にして刊行した²⁴⁾(うち弘田が発表した11曲は資料1-3を参照)。このほかレコード録音、ラジオ放送等によっても仏教聖歌の普及に努めた²⁵⁾。しかし、戦時行政機構改正のため同協会は昭和15(1940)年8月に閉鎖された。

この「仏教聖歌」について、福本は次のように特徴づけている。一つは、音楽的側面に着目すると、それまでの西洋語法による仏教音楽(=仏教唱歌や讃仏歌)に比して、「多声による合唱曲スタイルの導入やオリジナルな伴奏の存在など、音楽作品として芸術的な進歩(相対的にはあるが)を遂げて」いることだ。もう一つは、「仏教聖歌」の演奏の場と担い手に注目すると、演奏は法要で用いられたのではなく、発表会や仏教関連のイベントで発表され、千代田高等女子専門学校や京都女子専門学校、龍谷大学など、仏教系の女子専門学校や大学の学生

合唱団、そして弘田のパドマ合唱団などによって歌われたことだ²⁶⁾。

以上をふまえ、福本は二つの観点から仏教音楽協会の存在意義を以下のように導き出している。第一に、仏教聖歌運動に音楽関係の学生青年層団体との協力体制があった点である。当協会の理事を務める高楠は、仏教による児童教化とそれに続く世代に向けた学生仏教青年会運動を推進していたことから、青年層との協力体制は、仏教思想家の目指す仏教による徳育教育の面で非常に有意義なものであった。第二に、「文部省宗教局内」という表記による仏教音楽協会の社会的位置付けの点である。すなわち、当協会が国家機関のお墨付きを与えられた団体としてブランド価値を有することで、仏教聖歌運動も教育の面で有意義な運動として認識されるだけでなく、国家にとっても仏教教団という一大組織を利用することで、国民教育と人心掌握の面でメリットがあった。つまり、仏教音楽協会は単に仏教思想をより所とした「仏教聖歌」を歌う音楽愛好家団体ではなく、仏教教団や思想家、文部省宗教局などの様々なレベルでの社会的運動と結びついた団体だったのだ²⁷⁾。

2) 日本仏教童謡協会

一方、民間では昭和2(1927)年²⁸⁾、「日本仏教童謡協会」が詩人 江崎小秋を主宰に創設された。顧問に高楠順次郎、北原白秋、弘田龍太郎、中山晋平、宮城道雄、野口雨情、藤井清水、室崎琴月、印牧季雄、巖谷小波他(多くは前述の「仏教音楽協会」の役員も兼任している)、同人に賀来琢磨、本多鐵磨、藤井制心他を糾合し、新仏教歌謡、新仏教音楽、新仏教舞踊の創設と普及を目的に掲げた。同協会はまず、児童を対象とした仏教童謡と遊戯(舞踊)を融合させた作品発表とその普及を目指し、『佛教童謡曲譜と遊戯』(全16冊)を発行した後、舞踊音楽作品に関する論考など仏教音楽や関連分野を広く取り上げた機関誌『新佛教音楽』の発行を始めた。いずれも仏教音楽に児童舞踊を融合させているのが特徴で、大正末から昭和にかけ学校教育でも児童舞踊が盛んに行われたことが影響していたものと思われる。

弘田は『新佛教音楽』の編輯顧問に就き、創刊号(1932年10月)の巻頭言に「新佛教音楽の建設」と

題し、次のような宣言文を寄せている。

新佛教音楽は、何處までも宗教音楽でなければならない。眞の佛教樂でなければならない。單に洋樂又は古き佛樂の模倣であつてはならない。此等のよき所を採り、而して現在の思想に合致するものを盛り、此れを相化合せしめて以て創作の基礎とす可きである。余は新佛教音楽の建設を絶叫する而かもその建設に就いては、佛教界全體の理解と援助とを切望して已まないのである。

弘田は本稿の第1章でも述べていたように、明治から大正にかけての仏教唱歌や讃仏歌の単なる模倣ではなく、それらのいい所どりをしつつ大衆に馴染める音楽言語でもって、まったく新しい「新仏教音楽」を作ることが必要だと主張している。

ちなみに、江崎は弘田との出会いについて、同じく創刊号で次のように語っている。

新佛教音楽運動は俺の仕事だ。俺がやるんだ。俺じゃなければ出来ないんだ。と先づその運動の前提として大正十三年の春、小さい雑誌『『佛教童話と童謡』：引用者註』を發刊し始めた。その頃から崇敬してゐた野口雨情氏に、私は私の爲すべき仕事に就いて語つた。〔中略〕一時的なものでなく、私は永久に残しておくやうな、又、永久に歌唱してくれる佛教歌謡の方面に進みたい。幸ひに我國では誰も研究してくれないので私は身命を賭して研究に没頭してみる。といふ様な意味を語つたところ、野口氏は非常に喜んで援助を約束され、早速、「花祭りの歌」を執筆せされ、作曲に弘田龍太郎氏を紹介せられた。〔中略〕幾日か経つて弘田氏と會つた。その時、弘田氏は既に佛教音楽を研究してゐられることを知つて私の勇躍は筆舌に盡されなかつた（下線筆者）²⁹⁾。

江崎はこの「花祭りの歌」【譜例1】³⁰⁾（9頁参照）を記念すべき「新佛教音楽史を飾る最初の作品」として、『新佛教音楽』創刊号の表紙の背景に楽譜を掲載していることから、この曲を「新仏教音楽」の象徴と位置づけていたのだろう。江崎は前述に続けて、「釋尊降誕會の季は來た。そして發表した『花

祭りの歌』は私の要求してゐた新しい佛教音楽として生まれた。と同時に、その頃の佛教界の要求してゐたもので多大の効果を、その後釋尊降誕會には必らず衆人の口から流れ出るやうになつた」³¹⁾と述べている。これはおそらく本曲がルンビニー合唱団によって初演された（3-1.で後述する）①「第一回試演会」か④「新佛教音楽第一回公演 佛降誕會花祭りの夕べ」のことと思われるが、前者のプログラムによると弘田はこの曲を「準仏教曲」に分類している。実際、曲はヨナ抜き音階による弘田らしい童謡調の作風で、『弘田龍太郎作品集 2』では「童謡」に分類されているため（註2参照）、弘田の考える新仏教音楽と江崎のそれとは多少異なっていたのかもしれない。

『新佛教音楽』は昭和12（1937）年の第28号で廃刊となり（同誌に掲載された弘田の仏教洋楽作品は資料1-3参照）、当協会は実質活動停止となった。第二次大戦下ゆえ、「仏教音楽協会」も「日本仏教童謡協会」も昭和の戦前で解体されたが、弘田は前者では青年層に向けた「仏教聖歌」を、後者では児童を含めた「仏教童謡曲」を通して、両協会の目指した新しい仏教洋楽作品の創出に寄与していた。しかし、彼が新仏教作品の本領を発揮する場として考えていたのは、次章で述べる自らの合唱団だったと思われる。

3. ルンビニー合唱団とパドマ合唱団

3-1. ルンビニー合唱団と演奏会

ルンビニー合唱団の活動については、飛鳥寛栗と山口篤子の研究に詳しい。本章ではこれらの先行研究をもとに、合唱団主催の演奏会で発表された弘田の仏教作品を整理するとともに、本研究で新たに得た雑誌『アカツキ』に記載された合唱団の活動記事を加えて論ずる。

高楠順次郎と歌人の九條武子を迎えたルンビニー合唱団の団員について、現在のところ明確な記述は見つかっていないが、山口の研究によると「若い仏教徒で、創設時の団員数は20人に満たなかった」という。また、演奏会プログラムに混声合唱曲が挙がっていることから男女で混成されているであろうことや、後援に帝大仏教青年会と仏教女子青年会が

記載されていることから両会のメンバーがルンビニー合唱団の団員と重複していたのではないかと推察されている³²⁾。仏教女子青年会とは、大正13(1924)年に女性の(仏教)教育にも力を注いだ高楠が築地本願寺内に武蔵野女子学院³³⁾を創設した際、女性の社会参加や地位向上を目指す使命のもと、自ら会長となって設立したもので、会員は二十代が過半数の二百名余りだったという³⁴⁾。ルンビニー合唱団の顧問で、帝大仏教青年会と仏教女子青年会の両会長でもあった高楠を通じて、合唱団員と両青年会が重複していた可能性は高いだろう(後述の雑誌『アカツキ』の記事(3)、(5)を参照)。

ルンビニー合唱団の主催による演奏会は、日本近代音楽館に所蔵されているプログラムより以下の5回開催されたことが確認できる。

①第一回試演會

大正15年3月27日(土) 所 帝大佛教青年會館

②第二回佛教音樂試演會

大正15年6月20日(日) 所 帝大佛教青年會館

③第三回佛教音樂試演會

昭和2年3月13日(日) 所 帝大佛教青年會館

④新佛教音樂第一回公演 佛降誕会花祭りの夕べ

昭和2年4月8日(金) 所 帝大佛教青年會館

⑤コドモの花祭り

昭和5年4月6日(日) 所 本所公會堂

弘田は昭和3(1928)年4月から翌年6月まで文部省在外研究員として渡独していたため、合唱団での活動は①から④の演奏会に関わった約一年で、⑤以降ルンビニー合唱団主催の公演記録は見当たらない。山口の研究には①～④の演奏会演目の詳細が掲載されているが、本稿では①～⑤の各演奏会で発表された弘田の仏教洋楽作品を資料1-2にまとめた。なお、①のプログラムには、弘田が以前に童謡として作曲したもののだが歌詞の内容から仏教音楽に入れたものを「準仏教音楽」(資料1-2の*をつけたもの)とし、本演奏会のために新しく作曲したものを「新仏教音楽」として区別している旨が記されており、いわゆる「新仏教音楽」の作品に限定すると、全5公演で弘田が新仏教音楽を発表したのは15曲である。

ところで、前述の仏教女子青年会は機関誌『アカ

ツキ』³⁵⁾を発行しており、「會のたより」の欄や巻末にルンビニー合唱団の演奏会案内や連絡等が随時記載されている。これらの記事からルンビニー合唱団の活動と弘田の関わりについて新たにわかったことを以下に整理してみよう。

まず、ルンビニー合唱団の練習場所について、以下のような記述が見られる。

(1) 第二巻第七号(大正15年7月)

「ルンビニー合唱團」

新佛教音樂樹立の爲に組織せられたルンビニー合唱團は去る三月下旬、第一回試演會を開き、引續き毎日曜日、弘田龍太郎先生のお宅で練習をつづけて居りましたが、第二回試演會を六月二十日午後七時から帝大佛教青年會館で開催いたしました(下線筆者)³⁶⁾。

(2) 第三巻第五号(昭和2年5月)

佛教音樂講習會……本郷區向ヶ岡彌生町三ノはノ八 弘田龍太郎氏方に事務所をおくルンビニー合唱團は五月中毎土曜午後二時より四時まで第一回の佛教音樂講習會を開くことになりました。講師は高楠順次郎氏弘田龍太郎氏石川友松氏で會費二圓、主に佛教日曜學校及び保育所係の婦人を歓迎するさうです(傍点原著、下線筆者)³⁷⁾。

(1)の記事より、合唱団は①の第一回試演会以前より毎日曜日、弘田の自宅で練習をおこない、第一回試演会後も第二回試演会に向けて引き続き弘田の自宅で練習を続けたとある。また、(2)の記事によると、ルンビニー合唱団の事務所は帝大仏青会館ではなく、弘田の自宅におかれているという。このことを証明する資料は他に見当たらないが、創設者の櫻井が急逝したことによるものか何らかの理由で、合唱団の主導権は実質弘田に移行していたことが推察される。

次に、④「新仏教音楽第一回公演」に関する(3)と(4)の記事に注目してみる。①から③の試演会を経て迎えた、いわば「新仏教音楽」の本公演として開催された「佛降誕会花祭りの夕べ」では、これまで試演会で演奏されていた準仏教作品は見られず、初演も含め、ほぼすべて新仏教音楽の作品を発表している。弘田が自身の「新仏教音楽」を発表する格別の

演奏会として開催したであろうことは、合唱団が演奏会前日にラジオ放送に出演していたことからもうかがえよう。

(3) 第二巻第四号（大正15年4月）「會のたより」より

◇本月七日夕八時より ルンビニー合唱團は花まつりのラヂオ放送を致します。

◇翌八日六時半から帝大佛教青年會館で帝大佛教青年會と聯合にて「花祭りの夕べ」と稱し、講演と音樂の會を開きます（下線筆者）³⁸⁾。

(4) 第三巻第五号（昭和2年5月）

花まつりのタールンビニー合唱團第一回公演—
ルンビニー合唱團はこの度、兼ねてから現代的な佛教音樂の創造に努力してゐて下さる弘田龍太郎御講演がありました。そのあと二十分休憩の間に參聽者に甘茶の供養を致しました。

次に行つた梵詞「佛所行讃」は今回の主要曲目で、その演奏は全く前例のないことであります。その作曲は弘田先生の非常な御苦心の結果なつたものであり、又合唱指導に依り、帝大佛教青年會、及佛教女子青年會の後援を得て從來未だ例のない清新で莊嚴な音樂的花まつりを行ふことが出来ました。〔中略〕

今回の試みは全く初めてなので、練習その他に稍不十分な憾みもありましたが、でも新しい佛教音樂を以て花まつりを催したことは確に劃期的なことだと思ひます（下線筆者）³⁹⁾。

ここでも弘田の「新仏教音楽」による画期的な演奏会だったことが強調されている。なお、④の開催直後に発行された(2)、(4)の冊子には、ルンビニー合唱団主催「佛教音楽講習會」の大々的な案内が掲載されている。近來仏教音楽会の勃興にもかかわらず仏教音楽に関する講習會は一度も開かれていないため、本団体が率先して開催することにしたという趣旨が書かれ、會員参加を募集している。高楠や弘田らが講師を担当し、講習會会場は東大仏青會館だが、本部は弘田の自宅住所を記したルンビニー合唱団となっている。実際にこの講習會が開催されたのか、それを示す資料は見つかっていないが、④の開催に続き新仏教音楽をますます発展させていくことを意

図し、企画されたのだろう。

④の演奏会の一年後、弘田はドイツ（ベルリン）への留学を経て、「黄金の20年代」とよばれる1920年代のベルリンの芸術を体感し、昭和4（1929）年に帰国した。その後、彼が指揮者として就いたのがパドマ合唱団である。

3-2. パドマ合唱団と演奏会

ルンビニー合唱団との最後の演奏会「コドモの花祭り」で指揮を務めた弘田は、その前日の昭和5（1930）年4月5日に小石川の伝通會館主催の「花まつり」の演奏会において、パドマ合唱団指揮者として登場していた。パドマ合唱団は、東京小石川の伝通院が教化事業の殿堂として伝通會館を建設した際、會館の主事 鈴木積善の主唱で結成された。弘田が指揮者として招聘された経緯は定かではないが、前述のルンビニー合唱団主催「コドモの花祭り」のプログラムには、伝通會館日曜學校兒童による遊戲や鈴木積善による童話の朗讀が見られるため、弘田と鈴木はすでに交流を持っていたのだろう⁴⁰⁾。ドイツから帰国直後、作曲に邁進するため東京藝大の教授を辞した弘田にとって、パドマ合唱団の指導者としての就任は好都合だったに違いない。

パドマの団員は若い世代の人々で、「当時の大正大学生で音楽の趣味をもつ学生はこの合唱団に参加していた」⁴¹⁾ということから、多くは仏教系の大学生らで構成されていたことが考えられる。下記⑨の演奏会プログラムには合唱団への入会広告が以下のように掲載され（②、⑤にも広告掲載あり）、ルンビニー合唱団より本格的な混声合唱団として創設されたようだ。

一、目 的	佛教音樂の普及興隆並に合唱の練習
一、練習日	毎週月曜日 女子部（午後四時より五時半迄） 男子部（午後七時より八時半迄）
一、練習場	小石川區表町傳通會館
一、申込金	金五拾賤也
一、會 費	雜費として月金貳拾賤也
一、指揮者	弘田龍太郎

飛鳥の研究によると、パドマ合唱団が出演し弘田が指揮した演奏会は以下の12公演が確認されてい

る（日本近代音楽館に全プログラムの所蔵あり）。

- | |
|---|
| ①花まつり 主催：伝通会館
昭和5年4月5日（土） 所 伝通会館講堂 |
| ②パドマ合唱団 第二回讃歌演奏會 主催：伝通
会館
昭和5年6月21日（土） 所 伝通会館講堂 |
| ③パドマ合唱団 第三回讃歌演奏會 主催：伝通
会館
昭和5年11月16日（日） 所 伝通会館講堂 |
| ④法然上人御忌會 後援と音楽の夕 主催：伝通
会館
昭和6年1月25日（日） 所 伝通会館講堂 |
| ⑤釋・尊涅槃會 講演と音楽の夕 主催：伝通会館
昭和6年2月15日（日） 所 伝通会館 |
| ⑥佛教大師讃仰の夕 主催 天台宗顕揚會
昭和6年6月20日（土） 所 伝通会館 |
| ⑦新佛教音楽春季大演奏會 主催：伝通会館
昭和6年6月28日（土） 所 伝通会館講堂 |
| ⑧合唱の夕 主催：パドマ合唱団
昭和6年11月28日（土） 所 伝通会館講堂 |
| ⑨釋尊降誕會讃歌全演奏 花まつり・音楽の夕ベ
主催：伝通会館
昭和7年4月9日（土） 所 伝通会館講堂 |
| ⑩第二回 合唱の夕 主催：パドマ合唱団
昭和7年6月18日（土） 所 伝通会館 |
| ⑪第3回大演奏会 深沢一郎・本多鐵磨・吉川孝一
作品発表 主催：パドマ合唱団
昭和7年11月27日（日） 所 伝通会館 |
| ⑫仏陀曲発表会 主催：パドマ合唱団
昭和8年6月24日（土） 所 伝通会館 |

上記12公演のプログラムによると、長妻完至や本多鉄磨らの新作発表も多く、弘田の仏教作品は初演も含め10数曲にとどまっているが（資料1-2参照）、ルンビニー合唱団で発表されていたようなヨナ抜き音階による童謡調の作風とは明らかに異なっている。たとえば、④で初演された法然上人御歌による「春・夏・秋・冬」や⑤で初演された《涅槃會の歌》（松浦一詞）では半音階が積極的に使用され不安定な調性感が見られる。なかでも⑫で発表された「仏陀三部曲」（第一部 ルンビニー園、第二部 菩提樹下、第三部 沙羅双樹）においては、広い音

域を駆使したピアノ伴奏は奏法的にもかなり難度が高い（『ムジカ』に掲載された「第二部 菩提樹下」の独唱アリア【譜例2】⁴²⁾ 9頁参照）。特に二度をぶつけた不協和音が頻出する点など、荒々しいオクターヴやトレモロとともに、弘田がベルリンで知ったであろう同時代のモダニズム（ストラヴィンスキーやヒンデミットら）からの影響が顕著であり、以前の作風からは想像もつかない「現代的な」響きを志向している。弘田自身も、「これは降誕、成道、涅槃の三部曲になつてゐまして、演奏するのにたつぷり二時間半かゝる大物です。この作曲の時は、大変ものがきました。佛陀の大人格をリズムを通して如何に表現しようか、一筆々々に佛陀の偉大さに打たれて、怖氣がつき、それでも、感奮しながら仕事を續けたのですが、ヘトヘトになりました」⁴³⁾と語っているように、これを自身の仏教音楽の集大成と位置づけていたのだろう。

弘田はこの発表会を機に、パドマ合唱団の指揮を辞任した。「仏陀三部曲」の発表を終え、後進に道を開く潮時との意向を表明したようだが、実際には合唱団員の退団問題に拠るものだった。元団員は、内部の者のみが知る事情を次のように語っている。「あの楽譜のむづかしいものを教材に使はれるのを止して初歩から、もつとやさしいものから教へて戴くやうに座をまじえて、パドマ改革の根本から、プランを建て直して、今一步、先生に踏み止まつて貰はなかつたのでせうか」。弘田の辞任を黙認した伝通会館側の対応は遺憾だとし、自身も楽曲の難しさゆえ退団したこと、「傳通會館には、大それた佛教音楽合唱團は重荷ではなかつたでせうか」、と疑問を投じている⁴⁴⁾。東京音楽学校教授の小松平五郎が後任に就いた後、パドマ合唱団の活動は継続されたものの、低調に終わったようである。弘田は「身命を賭してまでの唯一の研究道場であった（元団員の言葉）」パドマ合唱団で、自身の理想郷を築くことを諦めざるを得なかったが、「仏陀三部曲」のようなオペラ風の壮大な楽曲上演は、パドマ合唱団の存在なくしてはあり得なかったことであろう。

おわりに

弘田が仏教音楽を集中的に作曲していた期間は、

【譜例1】



【譜例2】

「仏教音楽協会」と「日本仏教童謡協会」が相次いで創設され、仏教界の洋楽受容が最も盛んな頃だった。しかし、昭和15（1940）年までに両会がともに消滅すると、弘田も仏教音楽作品をほとんど書かなくなってしまう。すなわち弘田の創作人生の中での仏教音楽作品は、およそ次のように位置づけられるだろう。幼児や子どもを対象にした単旋律による童謡から出発した彼は、やがてルンビニー合唱団を想定した、青少年を対象とする二部～四部による多声部の合唱作品を書くようになり、そしてドイツ留学を経て、パドマ合唱団におけるヨナ抜き音階から脱却した壮大なオペラ作品「仏陀三部曲」の構想へと至るのである。弘田の最も充実した創作期に書かれた仏教音楽作品は、弘田の創作の全貌を明らかにするうえで非常に重要であり、今後のさらなる研究が必要であろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、相愛大学図書館所蔵の貴重資料の閲覧等に多大なるお力添えを頂きました音楽学者で浄土真宗本願寺派 福円寺住職の福本康之様、ならびに高楠順次郎蔵書の資料を提供くださいました東京仏教青年会の皆様に深謝申し上げます。なお、本研究は2019年度科研費 基盤研究（C）JP19K00142の助成を受けたものです。

註釈

- 1) 『弘田龍太郎作品集』1～3、音楽之友社、1959年。
- 2) 本作品集では「童謡」に分類されているが、歌詞に仏教の内容を含む《ののさま》（江崎小秋詞）と《花祭の歌》（野口雨情詞）を加えると8曲になる。
- 3) 日本近代音楽館に所蔵されている弘田龍太郎文庫の資料は未整理のものが多く、自筆譜による仏教作品がさらに存在している可能性が高い。
- 4) 飛鳥寛栗『それは仏教唱歌から始まった』（4章「弘田龍太郎の合唱運動」）樹心社、1999年や飛鳥寛栗編『日本仏教洋楽資料年表』法藏館、2008年。
- 5) 山口篤子「近代日本の合唱史と仏教界—ルンビニー合唱団と仏教音楽協会をめぐって—」『浄土真宗総合研究』第4号、2009年、208-190頁。
- 6) 弘田龍太郎「殿堂より街頭へ」『大法輪』3巻7号、1936年、75頁。
- 7) 同前、76頁。
- 8) すでに仏教作品を手がけていた弘田は、自身の仏教興隆運動に高楠らが賛助し、ルンビニー仏教楽団が誕生したと述べている（同前、76-77頁）。
- 9) 山口・前掲 註5) 参照。
- 10) 幡谷正雄「宗教音楽の一考察—ルンビニー合唱団を聴く—」『音楽新潮』第3巻第5号、1926年、16頁。
- 11) 同前、18-19頁。
- 12) “The Lumbini Chorus” *Young East*, No. II vol.1(April 1926): 371
- 13) 大地宏子「邦楽調査掛における弘田龍太郎の記譜作業について—再調査と浄書を中心に—」『現代教育学部紀要』第14号、2022年、37-48頁参照。
- 14) 『東京大学音楽部50年史』東京大学音楽部、1971年。

- 15) 同前書、48頁。
- 16) 木村ますみ「父・弘田竜太郎を語る」『どうよう』31号、1992年、17頁。
- 17) 同前、18頁。
- 18) 仏教的内容の歌詞をもった《春のやよひ》(『諸学唱歌集 初編』に所収)が、明治10年代後半に少年講において歌われていたという事例をして、仏教界における洋楽受容の始まりとされてきた(福本康之「仏教界における初期洋楽受容—洋楽の位置づけを中心に—」『阪大音楽楽報』第2号、2004年、164頁)。
- 19) 福本康之「仏教洋楽に対する進歩史観および芸術至上主義的価値観について—仏教洋楽の歴史的再評価にむけて—」『浄土真宗総合研究』第1号、2006年、207頁。
- 20) 讃仏歌運動については飛鳥・前掲 註4)「二章 讃仏歌の父・野村成仁」を参照。
- 21) 福本・前掲 註20) 205頁。山田耕筰の仏教音楽に関する詳細は、飛鳥・前掲 註4)「三章 山田耕筰と西本願寺」を参照。
- 22) 福本康之「昭和戦前期の仏教洋楽に関する一考察(Ⅰ)—「佛教音楽協會」と同協会京都支部の活動を中心に—」『環境と経営』第7巻第1号、2001年、17頁。
- 23) 佛教音楽協會発行『佛教音楽』第1巻第1号、1936年。
- 24) 福本・前掲 註22)の資料5 佛教音楽協會発表「佛教聖歌」一覧を参照。
- 25) 昭和10～12年頃、仏教音楽協會は毎週一度、主に大学の合唱グループを対象に講習会を開き、作曲者(特に弘田や本居)らが彼らに新作の仏教聖歌を指導していた。また、協會がNHKから仏教聖歌のラジオ放送の依頼を受けた際には弘田と本居が彼らを連れて、放送局で合唱させていたという(金田一春彦『十五夜お月さん——本居長世 人と作品』三省堂、1982年、485-486頁)。
- 26) 福本康之「仏教音楽協會—戦前のムーブメントを読む」『仏教音楽』第43号、2001年、14-15頁参照。
- 27) 同前、15-17頁参照。
- 28) 創設年は飛鳥・前掲 註4) 175頁による。ただし、福本の研究によると設立に関する一次資料は確認されておらず、いくつかの二次資料より1926年から27年の時期と推定される。
- 29) 江崎小秋「新佛教音楽運動拾年の跡(一)」『新佛教音楽』創刊号、新仏教音楽刊行部、1932年、13頁。
- 30) 『花祭りの歌』寶文館、1930年。
- 31) 江崎・前掲 註29) 13-14頁。
- 32) 山口・前掲 註5) 205頁。
- 33) その後1927年に千代田女子専門学校を引き受け、1950年に武蔵野女子短期大学を開校。1965年に武蔵野女子大学を創設し、2003年に現在の武蔵野大学へ名称変更。
- 34) 外村彰「岡本かの子と高楠順次郎—雑誌『アカツキ』の周辺—」『滋賀大國文』(36)、1998年、2頁参照。
- 35) 大正14(1925)年から昭和16(1941)年まで全17巻170号まで発行された。
- 36) 『アカツキ』第二巻第七号、1926年、45頁。
- 37) 『アカツキ』第三巻第五号、1927年、30頁。
- 38) 『アカツキ』第二巻第四号、1926年、46頁。
- 39) 『アカツキ』第三巻第十号、1927年、38頁。
- 40) 昭和5年5月発行の『アカツキ』(第六巻第五号)の巻末「佛教女子青年會連絡事業」欄に、「佛教の音楽修養としてのルンビニー合唱團」として楽長 弘田龍太郎と掲載されているため、「コドモの花祭り」をもってルンビニー合唱團は解散されたように推察される。
- 41) 高橋良和「本多鉄磨とその作品について—仏教聖歌への開拓—」『佛教福祉』6号、1979年、131頁。
- 42) 『ムジカ』3巻10号、1933年、頁なし。
- 43) 弘田・前掲 註6) 79頁。前述の『新佛教音楽』の中では、「すばらしかった『仏陀三部曲』の発表」と題し、プログラムとあわせて「本會顧問弘田龍太郎氏は、十年来『佛教音楽の大成』を目ざしてその方面の研鑽に文字通り努力を捧げられてきたが、遂に、仏陀三部曲となって現れた」、と掲載されている(「佛教音楽舞踊界展望」『新佛教音楽』第7号、1933年、36-37頁)。
- 44) 元パドマ會員 R・O女「再起不能を傳へられるパドマ合唱團に就いて」『新佛教音楽』第8・9合併号、1933年、56-57頁。

受付日 2023年3月15日

受理日 2023年5月17日

Abstract

The composer Ryūtārō Hirota wrote a considerable number of Buddhist music scores, but most remain unpublished autographs. This is likely because these pieces have not been recognized as legitimate works of art owing to perceptions of religion. This paper reviews Hirota’s Buddhist music pieces, examining their characteristics and clarifying their significance in relation to the rest of his oeuvre.

The “Buddhist Music Association” and “Japan Buddhist Children’s Songs Association” were established from the end of the Taisho period to the second decade of the Showa period when Hirota focused on composing Buddhist pieces; there was a growing acceptance of Western music in Buddhist circles aiming to create new Buddhist music. Hirota worked with both associations, conducted the Lumbini Chorus and Padma Chorus, and successively presented his compositions of new Buddhist music. In particular, his works with the Padma Chorus, following his studies in Germany, included his most musically rich pieces such as magnificent opera compositions, a departure from the previous children’s-song style.

Keywords : Hirota Ryutaro, Lumbini Chorus, Padma Chorus, Buddhist Music Association, Young Buddhist Association of The University of Tokyo

【資料】 弘田龍太郎 仏教音楽作品

1-1 飛鳥寛栗編『日本仏教音楽資料年表』註4)より作成

年号	月日	曲名	作詞者	形態	出版楽譜	日本近代音楽館
1921(大10)	2.13	寺の庭	室生犀星	独唱(伴:P)	『弘田龍太郎作品集3』	○
		花まつり	相馬御風	独唱(伴:P)	『弘田龍太郎作品集1』	○
1922(大11)	8.1	かなかな蟬	相馬御風	独唱(伴:P)	『かなかな蟬』東光閣書店	○
	10.5	尼	柳沢捷			○
1923(大12)	2.24	よろこび	松原至大	混声4部	『よろこび』實文館	○
1924(大13)	3.8	花祭りのうた	野口雨情		『弘田龍太郎作品集2』 『花祭りの歌』實文館	○
1926(大15)	3.18	無憂樹の花	九條武子	女声2部	『弘田龍太郎作品集3』 『無憂樹の花』實文館	○
	3.27	①ルンビニー合唱団:第1回試演会				
	3	The Sunrise Cones!	Edwin Arnold	混声4部	Young East	○
	5.15	清風宝樹ヲフトキハ	親鸞聖人	ア・カベラ/混声4部		○
	5	宝林宝樹微妙音	親鸞聖人	ア・カベラ/同声2部		○
	5	『浄土和讃』の「真実信心」 「利他の信心」「十方劫沙」諸仏	親鸞聖人	混声4部(伴:P)		○
	?	歌劇「仏陀の生涯」	馬鳴			
	6.2	②ルンビニー合唱団:第2回仏教音楽試演会				
1927(昭2)	3.13	③ルンビニー合唱団:第3回仏教音楽試演会				
	3.27	灌仏偈	經典	男声4部	『灌仏偈』實文館	○
	3.29	聖誕の歌	九條武子			○
	4.8	④:ルンビニー合唱団:新仏教音楽第一回公演				
	10	成道の歌	九條武子	女声/男声/混声	『弘田龍太郎作品集3』	○
	11.1	超世偈	經典	ア・カベラ/混声4部	『超世偈』實文館	○
		悟後偈	經典	ア・カベラ/混声4部	『悟後偈』實文館	○
		合掌	九條武子	Solo付混声4部	『合掌』實文館	○
1930(昭5)	1.12	勢至円通偈	法然上人御歌	ア・カベラ/男声4部		○
	4.5	①パドマ合唱団:花まつり				
	4.6	⑤ルンビニー合唱団:ヨドモの花祭り				
	5.13	伝通会館会歌	作詞者不詳	ユニゾン/混声4部		
	6.21	②パドマ合唱団:第2回讃歌演奏会				
	11.2	③パドマ合唱団:第3回讃歌演奏会				
1931(昭6)	1	法然上人諱草による 四つの歌「春・夏・秋・冬」	法然上人御歌	混声4部(伴:P)	『ムジカ』7巻2号 『弘田龍太郎作品集3』	
	1.25	④パドマ合唱団:「法然上人御息会・講演と音楽の夕				
	2.6	涅槃会の歌	松浦一	混声4部(伴:Or.P)	『ムジカ』3巻10号	○
	2.7	敬礼天人		ア・カベラ/混声4部		○
	2.15	⑤パドマ合唱団:釋尊涅槃會 講演と音楽の夕				

6.2	⑥パドマ合唱団:傳教大師讃仰の夕				
6.28	⑦パドマ合唱団:新佛敎音楽春季大演奏會				
10.2	両祖降誕会の歌	吉田海純			○
10.3	弘法大使御遠忌奉讃歌	和賀秋堂			○
11.3	⑧パドマ合唱団:合唱の夕				
1932(昭7)	3.15	阿弥陀仏と	法然上人歌	ア・カベラ/混声4部	○
	3	柴の戸に	法然上人歌	混声4部	○
	3	法然上人讃歌(児童用)	中村和子	斉唱	○
	3.21	法然上人讃歌(青年用)	里見達雄	斉唱	○
	4.8	花まつりの歌	北原白秋		ルンビニー楽譜第1輯 (日本仏教児童協会)
4.9	⑨パドマ合唱団:釋尊降誕會讃歌全演奏・花まつり音頭				
6.18	⑩パドマ合唱団:第二回合唱の夕				
11.3	⑪パドマ合唱団:第3回大演奏会「深沢一郎・本多鐵麿・吉川孝一作品発表会」				
1933(昭8)	6.24	⑫パドマ合唱団 仏陀曲発表会			
	10	『佛陀三部曲』の「第二部 菩提樹下より(魔王の独唱)」	高安月郊	独唱(伴:P)	『ムジカ』3巻10号
1934(昭9)	6.17	仏陀	川路露紅	ア・カベラ/男声4部	○
	6.25	仏青行進曲	江崎小秋		『新佛敎音楽』第28号
1935(昭10)		天台宗真盛派宗歌	法道和尚		真盛派製作販売
	12.1	真理同信の歌	友松園諦		全日本真理運動本部刊
1936(昭11)	6.5	立ち渡る	日蓮上人御歌		『新仏教音楽』第23号
	6.14	舞踊曲 曼荼羅			タンダバットハ舞踊研究所 第8回舞踊公演発表
	9.1	ゆふべ	葛原しげる	ア・カベラ/混声4部	『ムジカ』7巻9号
1938(昭13)	1.3	千年祭	石川富士雄		成田幼稚園用
1940(昭15)	3.28	大谷婦人法話会讃歌	梅田まさ子		○
	9.6	薬草喻品讃	羽田野仁	混声4部	○
1945(昭20)	3.28	日本の子 疎開学童集団歌	松浦一		○
	3.29	仏敎報国国歌	土岐善麿		○
	3.29	うちまかす	松浦一		○
1947(昭22)	2.2	宗教平和の歌	土岐善麿		○
1948(昭23)	10.3	舞踊劇「良寛さま」	西澤実作・構成		わかば会児童舞踊会公演
1949(昭24)	11.5	求道 ブツレン楽譜号外	里見達雄	同声3部	第3回讃仏歌コンクール課題曲

※ 資料 1-2,1-3,1-4 の色つき部分は1-1編年史に記載がある作品

1-2 ルンビニー合唱団およびパドマ合唱団で
演奏された弘田の楽曲
(童謡等の一般曲や過去の演奏会での重複曲は省略)

ルンビニー合唱団			
曲 名	作詞者	出版楽譜	日本近代音楽館
①第1回試演会			
法の深山(弘田編曲)	土岐善静		○
*花祭りの歌	野口雨情	『弘田龍太郎作品集3』	○
*花祭り	相馬御風	『弘田龍太郎作品集1』	○
The Sunrise Comes!	Edwin Arnold	Young East	○
無憂樹の花	九條武子	『弘田龍太郎作品集3』	○
②第2回仏教音楽試演会			
*カマナカハな蟬	相馬御風	『カマナカハな蟬』東光閣書店	○
*迎へ火	北原白秋	『弘田龍太郎作品集1』	○
*村祭り	鹿島鳴秋	『弘田龍太郎作品集1』	○
極楽莊嚴(「讃阿弥陀偈和讃」より)			
・宝林宝樹微妙音	親鸞聖人		○
・七宝樹林クニニミツ	同上		
・清風寶樹ヲフクトキハ	同上		○
・一ーノハナノナカヨリハ	同上		
③第3回仏教音楽試演会			
*人を憎むころは去りぬ	岡本一平	『弘田龍太郎作品集3』	○
*なつかしく	岡本一平	『弘田龍太郎作品集3』	○
④新仏教音楽第一回公演			
序楽			○
礼讃歌			○
奏楽			○
灌仏偈	經典	『灌仏偈』寶文館	○
聖誕の歌	九條武子		○
降誕歌	松浦一	『降誕會の歌』寶文館	○
仏所行讃 世尊降誕品	馬鳴		
⑤コドモの花まつり			
ののさま	江崎小秋	『ののさま』寶文館	○

*は準仏教音楽、その他は新仏教音楽

パドマ合唱団 *一般曲による演奏会の⑧、⑩は除く

曲 名	作詞者		日本近代音楽館
①第一回公演「花まつり」			
弘田の仏教新曲なし			
②第二回讃歌演奏会			
傳通會館會歌	松浦一		
③第三回讃歌演奏会			
弔祭の歌	松浦一		
婚禮の歌	松浦一		
④法然上人御忌会・講演と音楽の夕			
勢至円通偈(初演)			○
春・夏・秋・冬			
・春(初演)	法然上人御詠	『弘田龍太郎作品集3』	○
・夏(初演)	同上	同上	○
・秋(初演)	同上	同上	○
・冬(初演)	同上	同上	○
⑤釋尊涅槃會・講演と音楽の夕			
敬禮偈(初演)			
涅槃會の歌(初演)	松浦一	『ムジカ』3巻12号	○
⑥、⑦			
弘田の仏教新曲なし			
⑧釋尊降誕會讃歌全演奏・花まつり音頭の夕べ			
「佛陀曲」より「第一部 ルンビニー園」(初演)	高安月郊		○
⑨第三回大演奏会			
弘田の仏教新曲なし			
⑩仏陀曲発表会			
第一部 ルンビニー園(⑨で初演)	高安月郊		○
第二部 菩提樹下	同上	『ムジカ』3巻10号	○
第三部 沙羅双樹	同上		○

1-3 機関誌等

『佛教聖歌』				
巻号	発行年月	曲 名	作詞者	形態
1 第五回発表	1933.5	わがあるじ(法句經による)	常盤大定	独唱(伴:P)
2 第七回発表	1936.5	仏の子供	甲斐静也	独唱(伴:P)
3 第七回発表	1936.5	忠孝ニ恩	野口雨情	独唱(伴:P)
4 第八回発表	1937.7	あきらけく	伝教大師	独唱(伴:P)
5 第八回発表	1937.7	西のお国(児童用)	武内俊子	独唱(伴:P)
6 第八回発表	1937.7	甲斐の黒駒	三宅武郎	混声四部(伴:P)
7 縮刷(第九回発表)第一巻	1938.3	釈迦牟尼世尊	井上賢順	混声四部(+打楽器)
8 縮刷(第九回発表)第二巻	1938.3	礼拝の曲		純正オルガン
9 第十回発表	1939.9	甲斐の黒駒	三宅武郎	同声三部
10 第十回発表	1939.9	捨身	小谷徳水	混声四部(伴:P)
11 第十一回発表	1940.8	お盆が来るから(児童用)	植藤はな子	独唱(伴:P)
『新佛教音楽』				
1 第2号	1930.1	静夜 *	九條武子	独唱(伴:P)
2 第16号	1934.1	日曜學校の(童謡)	榊原きよひこ	独唱(伴:P)
3 第23号	1936.6	立ち渡る(聖歌)	日蓮聖人御詠	独唱(伴:P)
4 第28号	1937.7	佛青行進曲	江崎小秋	独唱(伴:P)

* ルンビニー合唱団:③第三回仏教音楽試演会で初演

1-4 その他(所蔵は国会図書館、日本近代音楽館、飛鳥寛栗「仏教音楽コレクションA」ほか;
資料1-1〜3の重複曲は除く)

曲 名	作詞者	形態	楽譜
月影	法然上人御歌	独唱(伴:P)	『讃佛歌』(第三集)浄土宗兒童協會
静慮		オルガン	『讃佛歌』(第三集)浄土宗兒童協會
今日の感謝	江崎小秋	独唱(伴:P)	『興亜佛教國民唱歌集』
ほとけさまは	森山美苗	女声三部(伴:P)	筆写譜(京都女子大所蔵)/飛鳥寛栗編『うたのおくりもの 仏教童話名曲100選 I 秋・冬』
そよ風に	守安弥末野	混声四部(伴:P)	『合唱曲集響流一混声編 II』龍谷混声維持会
阿弥陀仏と申すばかり	法然	混声四部(無伴奏)	自筆譜(日本近代音楽館)
佛教保育の歌	安藤徇之介	独唱(伴:P)	『佛教各宗讃佛歌集』白眉音楽出版社